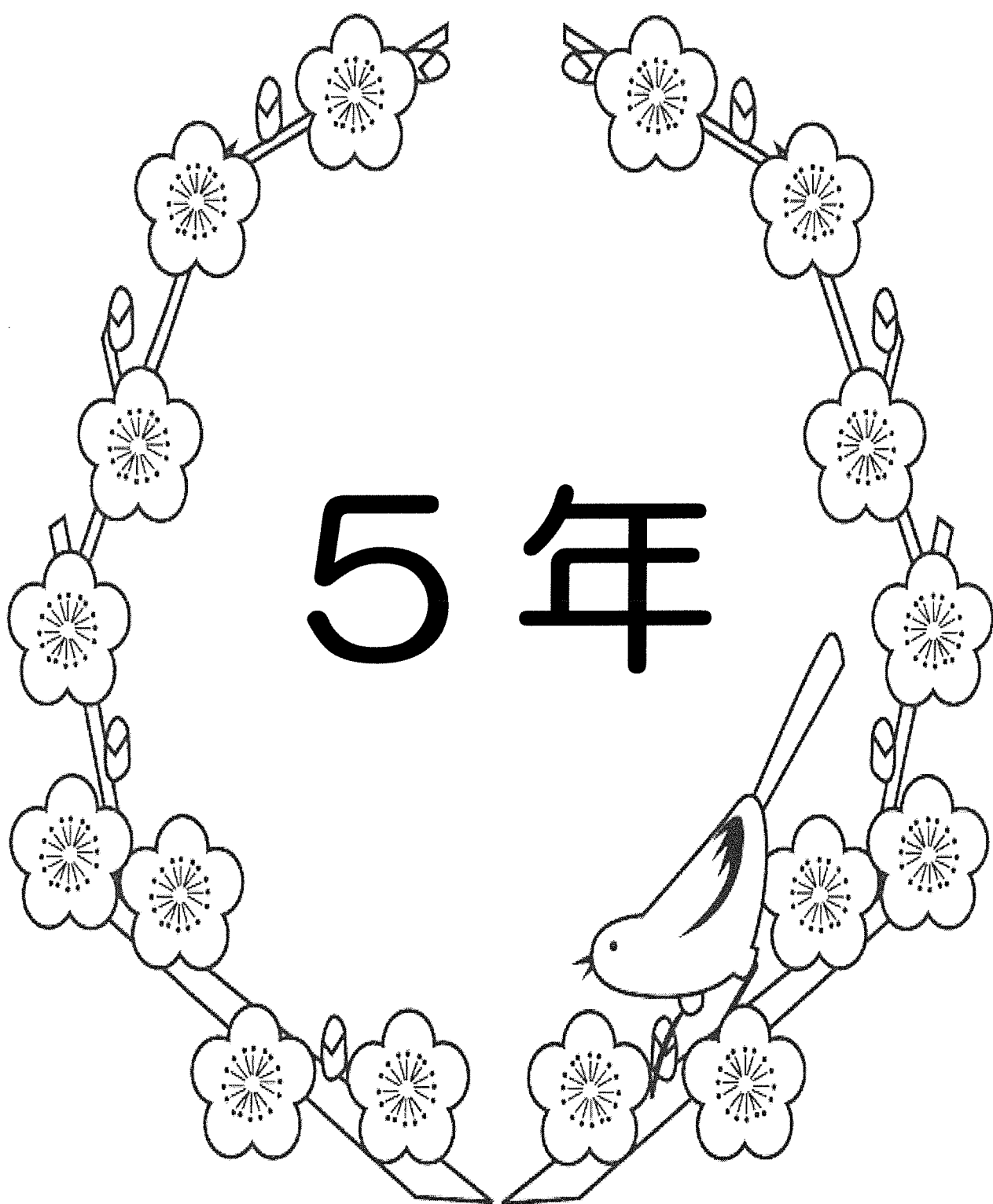




5年生 目次

5年1組

1～4ページ

5年2組

5～8ページ

5年3組

9～12ページ

五年一組

青少年読書感想文コンクール 都城地区審査入賞作品

「伏してぞ止まん」を読んで

山下 侑我

ぼくは、もともと本を読むのが、好きではありません。その理由は、テレビなどと違って文章なので、つまらないからです。

この本を読んで、考え方が変わりました。それは、聞いたことのない話だったからです。その内容は、主人公の宮本さんという人が、自分の命を捨ててまで、人を助ける話です。宮本さんは警察官であり、毎日、横断歩道をわたる子どもたちや、お年寄りの方にあいさつをしながら、見守るのが日課でしたが、ある日、駅のホームで女性が自ら命を絶とうとしていると、一報を聞いて、宮本さんはかけつけました。女性のところへ行き、その女性を線路のわずか隙間に入れて、その女性は助かったけれど、宮本さんは電車とぶつかって、六日後に息を引き取ってしまいました。宮本さんは命をぎせいにしても、人の命を助ける勇気がある人だなどと思いました。だれにでもできることでは、ありません。



ぼくが、この本の中で一番心に残った言葉が「伏しても止まん」でした。宮本さんのお父さんが言った言葉で「精一杯努力したうえで、もう一度踏み出し、うつ伏せに倒れるまで止めるな」という意味です。ぼくは、自分で決めたことを、最後まで努力して、あきらめないということだと思いました。

ぼくは、年長のころから空手を習っています。最初は、練習の時もいたくて泣くこともあり、とても弱くてやめたいと思うこともありました。いっぱい練習したけど、試合でなかなか勝てない時もありました。でも、あきらめずに練習を続けてきて、最近では勝てるようになってきました。強くなりたい、勝ち

たい気持ちをあきらめずに努力を続けてきたことが結果につながってきていると思います。

自分が決めたことを最後まであきらめずに努力していくことは、宮本さんのお父さんの口ぐせである、伏しても止まんの意味と似ているなと思いました。

ぼくの今の目標は、空手で黒帯になることです。全国大会で優勝することです。毎日のように練習をして強くなる努力をしています。この本を読んで、今以上に目標に向かってがんばる気持ちが強くなりました。

この本は、悲しい話でもあります。とても勇気がもらえる話でもありません。この本に出会えて、目標に向かって努力することや人に対する優しさなどを学ぶことができました。宮本さんのように、自分のことをぎせいにすることはかんたんではありませんが、自分ができる精一杯のことをしていきたいと思っています。

ヘルプマーク

東 水紀

みなさんは、ヘルプマークという言葉を知っていますか？

ヘルプマークの意味は、えん助が必要な方のマークです。例えば、外見では健康に見えても、内部障がいや、義足を使用している人やにんしん初期の人などえん助や配慮を必要とすることが、外見からはわからない人がいます。そうした人たちが、周囲の人に配りよを必要をしていることを知らせるマークがヘルプマークです。

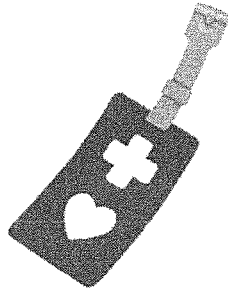
私の身近には、ヘルプマークをもっている人たちが何人もいます。みんなに知ってもらうために、この作文を書くと思いました。

私のお母さんもヘルプマークをもっています。お母さんは、本当に見た目では分からないぐらい元気です。だけど、心臓の病気で、体内に機械をつめこんでいます。私はお母さんがヘルプマークをもっていることで、エピソードがあ

ります。

一つ目は、お母さんと買い物に行ったときに知らない人に、手話みたいな感じでジェスチャーをされました。思わずびくびくりして「えーなんだろっ?」と一瞬思いましたが、その人を見たときにかばんにヘルプマークのキーホルダーをさげていました。お母さんも同じ、キーホルダーをもっていたので、「あつ、この人は、どこか障がいがある人なんだな。」とすぐに分かりました。その時に、わたしがにこっと笑ったら、その人もにこっと笑顔を返してくれました。そのことを、お母さんに話したら、「ヘルプマークのことを知ってよかったね。」と言ってくれました。しかし、一つ心残りがあります。それは、その手話で伝えてきたけど、その手話の意味が分からなかったことです。

今、オリンピックが開催されています。障がいのある人のパラリンピックも始まりました。目の見えない人がサッカーをしていたり、車いすののってバスケットボールをしたり、とってもおどろきです。オリンピックは、日本人だけではなく、世界中の国々の人も見れて平和の祭壇だなあと感じます。障がいがある人を「大変そうだな」とか「かわいそうだな」と思いがちですが、パラリンピックを見て、そんな気持ちはなくなり、「わあ、すごいな」「かっこいいな」と変化しました。パラリンピックが行われることで、ヘルプマークのことを知ってもらえたり、私のこの作文を読んで知ってくれた人も知ってくれたり、一人でも多くの人に伝えられたら、障がいがある人もない人も生活しやすい毎日が送れるんじゃないかなと思います。みなさんも、ヘルプマークをもっている人や車いすののっている人などに気づいたら、少しでも気にかけてください。そしてみんなが笑顔の毎日が送れますように。



捨犬・未来、幸せの足あとをよんで

平島 蓮

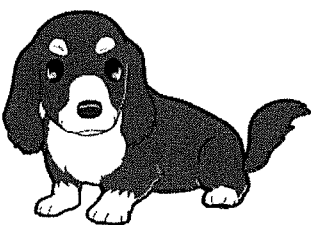
ぼくがこの本を読んだきっかけは、母にすすめられたからです。ぼくも最近犬を飼ったので、とても興味をもちました。

この本は、前の飼い主にぎやく待され、障がいをもった犬（未来）が、幸せになっていくお話です。読んでいくと、初めて知ることたくさんありました。未来は、大人が頭をさわろうとするとよけるのに、子どもが頭をさわろうとするとよけません。その行動がとても不思議に思いました。本を読み進めると、前の飼い主に頭をたたかれて、「大人の手が頭の上にくるリたたかれる」と学習して体が勝手に反応してしまうんだなと思いました。どうしてぎやく待をする人がいるのだろうか。ぼくが思うには、ストレスでものにあたっているのではないかなと思います。ゆるせない行動だと思います。

物語に出てくる未来は、後ろ足や右目を負っていますが、優しい飼い主と学校に「命の授業」に行つて、子ども達を勇気づけていました。未来はやさしくて強いなと思いました。今テレビで、パラリンピックをしています。この選手たちも、強いなと感じます。強くてかっこいい生き方をしています。

ぼくは、「コリア」という犬を飼っています。コリアは家族の一員です。犬の平均じゅ命は十三年から十五年です。コリアは今二さいなので、ぼくが二十四さいの時になくなるかもしれません。そう思うと一日一日を大事に幸せに過ごしたいです。コリアはミニチュアダックスフンドで、どう

長短足です。こしに負だんがきて、ヘルニアという病気になるりやすく、車いすになる可能性があります。そうならないように、太のぎみはよくないそうです。シャンプーをさせるのも負だんがくるみたいです。ぼくは、おやつをねだられると、もっているおやつを上へあげてしまいますが、気をつけようと思います。散歩に連れていくと、フーやミクという友達に会えてとてもうれしそうにびびります。



れからも運動もできるように、ほぐが散歩に連れて行ってあげたいです。そうすることで、少しでもコロナの犬生が幸せになるように手伝っていききたいです。

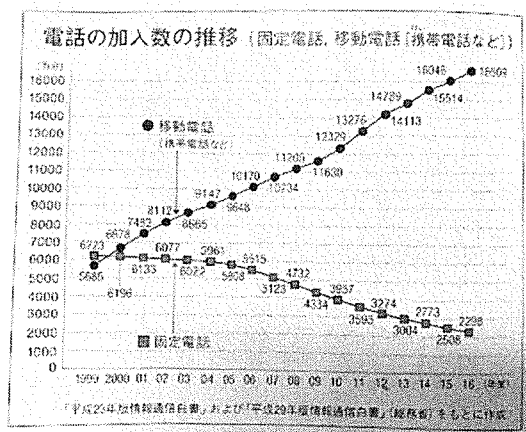
移動電話は便利で役立つ

(国語科学習單元：グラフや表を用いて書く)

森山 美羽

私は、日本の社会は、くらしやすい方向に向かっていると思います。なぜなら、昔は、移動ができない固定電話が多く使われていたけど、今は移動電話があつてどこにでも持ち歩ける電話があるからです。私の周りでも移動電話を持っている人がたくさんいます。

左のグラフは、電話の加入数の推移を表したものです。上の折れ線グラフは、移動電話(携帯電話など)を表し、下の折れ線グラフは、固定電話を表しています。これを見ると、移動電話が増えていることが分かり、固定電話は減っていることが分かります。移動電話のいちばん高い2016年と移動電話のいち



ばん低い1999年を比べてみましょう。2016年は16609万台で1999年は5685万台で、10924万台の差があることが分かります。移動電話がこれだけ多くなっているということは、どこでも持ち歩いて、便利な物だと言えます。便利で生活が豊かになる移動電話の数はこのまま増え続けると思います。このようにグラフをもとにして電話の加入数の推移が、一八年间で移動電話は10924万台増えているということを述べました。移

動電話がある社会は、いろんなことが学べたり、楽しい社会といえるでしょう。日本の社会は、くらしやすい方向に向かっていると思います。

〈参考〉「平成25年版情報通信白書」(総務省)

安全のために、小学生に携帯は必要ではない

田中 史恵

僕は、小学生に携帯は必要ではないと考える。

新聞やテレビで携帯はどんなものなのか、みたことがある。そこでは、「携帯は便利なものだが武器にもなる。」と書いていた。また、SNSなどで友達と仲が悪くなることもあると学校で習ったことがある。殺人まで起こったケースも実際にあることを知っている。

携帯はすぐに通信ができるから必要と思うかもしれない。しかし、使い方をちよつと間違えるだけで危険になる。例えば、知らない間に有害なアプリを使つてしまつていて、個人情報ほかの人に知られるなどの危険にあい、安全ではなくなつてしまつかもしれないからだ。知らない人からラインやメッセージがきて、変なサイトにさそわれるかもしれない、アカウントを乗っ取られるかもしれない。くじが当選してお金をもらえると嘘をついて、それをもらうためには「メールアドレスを入力してください。」などと個人情報を知ろうとするメッセージやサイトへのかんゆうがあるとも聞いたことがある。

制限をかけることや親が管理することで防げることもあるが、小学生は自分で考えて、絶対に正しい判断ができるとは言えないと思う。必ず安全に使用できるとは限らないという点から、小学生に携帯は必要ではないと考える。



一学期を振り返って

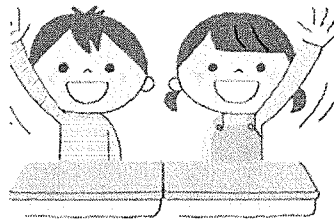
鶴田 蓮

わたしは、一学期がんばったことと二学期がんばりたいことが三つずつあります。

まず、一学期がんばったことです。一つ目は、先生の話や友達の発表をよく聞きました。先生の話を聞くと勉強がよくわかり、指示が通ります。また、友達の話を聞くと、いろいろな考えを知ることができ、自分の考えに選択肢が増えます。

二つ目は、発表をよくしたことです。発表をすると、その問題を理解できたか確にんができました。二学期も発表をがんばりたいです。

三つ目は、命についてよく考えました。命について考える学習がたくさんありました。その中でも、道徳のじゅ業では、「生きたくても生きられない子がたくさんいるから」と女の子が言っていて、わたしは、命の重さは、重すぎて量れないように感じました。



次に、二学期がんばりたいことです。一つ目は、だれかがやるという考えをやめるということです。わたしは、自分でできることを見つけたらできるだけやるようにしています。けれど、「ああ、一人で配っている。まあそのうちだれかが配るだろう。別にわたしがやらないうけないことはないし。」と思うことがあります。その場で、見つけたら自分から行動ができるようにしたいです。

二つ目は、忘れ物を減らすことです。絶対に忘れ物をしないとは言いきれないので、一か月に二つに減らします。そのためには、前日に準備をすることも大切だと思います。心がけて準備をしたいです。

三つ目は、一学期がんばったことを続けて行うことです。一学期だけががんばるのはだれにでもできます。わたしは、今できていることは続けてがんばりたいです。それとは別に、「今できないことができるようになる」ようにもがんば

ります。その反対も考えました。「今できていることができなくなる」ということです。例えば、これ以上コロナウイルスが感染者が多くなりできることが減ったり、友達が命を落としたりすると、今まで当たり前だったことはできなくなります。だから、当たり前をきめたいいけないと思います。

二学期も、目の前にあることに一生懸命に向き合いたいです。

稲刈り

甫木 優菜

稲刈りがありました。稲の様子が変わっていました。田植えの時は、苗が緑色で短かったけど、今日の稲刈りの前にみたら、黄土色とても長くなっていました。

最初に、コンバインで刈っているところをじっくり見ると、刈り終わって後ろから出てくる稲には、米つぶの部分がついていなくてびっくりしました。自分でかまを使って稲刈りをしてみると、最初はかたくてむずかしかったけど、なれてくるとどんどん早くできるようになりました。田んぼには、カエルやクモなどの生き物もいました。今まで気を付けながら活動ができて、けがもなくてよかったです。全部刈り終わったときは、気持ちがいっきりました。ほんとどしゃがんでいたので、こじがいたかったです。

お米を作るのは、たくさんの手間がかかること、機械がなくて手作業でしていた昔の人は大変だったことがわかりました。たくさんのおかけで米作りができたことに感謝したいと思います。



五年一組

「青少年読書感想文」入賞（県二席）作品

「悲げきの少女アンネ」を読んで

東 真菜

私は、「悲げきの少女アンネ」という本を読みました。この本を読んだのは、戦争に関する本を読みたいと思っていた時、母が紹介してくれたからです。本を見た時、一体どんな「悲げき」があったのだろうと思いました。

この本には、アンネがユダヤ人迫害にあいながらも、強く明るく、希望をすてず生きぬいたことが書かれています。第二次世界大戦中、アンネの住んでいたドイツでは、ユダヤ人をうらんでいたヒトラーが首相となり、ユダヤ人迫害をしていました。アンネ家族も、その迫害にあい、日常生活をうばわれ、かくれ家での生活の後、強制収容所に送られ、父以外は、みんな亡くなってしまいます。こんなことが本当にあったのかと思うと、こわくなり、またショックを受けました。



この話を読んで、心に残った場面が三つあります。

一つ目は、アンネの友達ユダヤ人だからというだけで、先生に「出ていきなさい。」と言われた場面です。その時アンネは、まだユダヤ人だと知られていないのに、「私もユダヤ人です。」と言って、その友達を助けます。つかまること分かっているから、私なら絶対にできない、勇気がない、こわいから言えないと思いました。自分がつかまってしまつ事を少しも考えずに、迷わず友達を助けたアンネがすごいと思いました。

二つ目は、アンネと家族が次々にはなればなれになる場面です。父と男女の違いが理由で、別れさせられます。次は、健康が不健康かで、母と別れさせら

れます。体が弱い母は、アンネたちの方には行けないけれど、気持ちが悪くなくっている姉を元気づけ、アンネと同じ場所に行けるようにします。母のやさしさと強さが伝わりました。また、はなればなれになると思うと、私だったら、悲しくて、つらくて、大声で泣き出すと思います。家族とは絶対に引きはなされたくないです。それでも、アンネは家族が生きていると信じて希望をすてずに、勇気をもって生きていこうとしたのがすごいと思いました。

三つ目に、毒ガスが出てくるシャワー室の事です。収容所に来た人に、清潔にするためにシャワーを浴びてくださいと言い、ユダヤ人が喜んでシャワー室に行くと、毒ガスが出てくるというものです。一日に数千人という罪のない人が命をうばわれたそうです。私は、一度喜ばせてから殺すというやり方が特にいやで、許せなかったです。

私は学校で「平和は当たり前ではない」と聞いた事を思い出しました。罪のない人が殺されてしまつ戦争や人種差別は、絶対にしてはいけないと思いました。そして、アンネの最後まで希望をすてず、周りの人にやさしく勇気づけていた姿は、私にあきらめない心や勇気をもつ事、くじけない心、自分が苦しくても人を思いやる心の大切さを教えてくれました。私もそんな人になりたいと思いました。

パンよりごはん

浅沼 紗衣

「米」という漢字には、意味がかくされています。「米」の字をばらばらにすると、八十八になります。お米ができるまでには、八十八回もの手間がかかる、という意味だそうです。

私は田植えをあまり知らなかったので、稲を植えるのはとてもかん単なのかもしれない、と思っていました。でも、五年生の総合の学習で田植えをしてみても大変なことなのだと気付きました。実際に田植えをしたのは、ほん

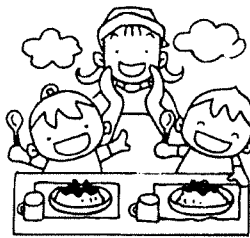
の一部かもしれません。けれど、私もお米作りに関わられてうれしいと思いました。一つぶ一つぶ、大事に食べたい、とも思いました。

私はよく、朝にパンを食べます。パンは手軽に食べられるし、味や種類がたくさんあるからです。でも、お昼までにお腹がすくのがご飯の時よりも早い気がします。学校の時も、給食はまだかな、と考えたりしています。同じ食べ物なのになぜだろうと思い、私は調べました。

小麦粉からできているパンは、消化が早く、ご飯はパンに比べると消化がゆっくりだからだそうです。それに、パンよりもご飯の方がかみごたえがあるから、腹持ちがよくなるそうです。だから、パンはすぐお腹がすいてしまうのだと気付きました。

私の母は、ご飯よりもパンの方が準備も楽で、みんな自分好みの物を食べられるからとパンを出してくれていたけれど、調べたことを話して、前よりももっとご飯の日を増やしてもらおうと思いました。

田植えや、今回調べたことをきっかけに、少しだけ、お米の大切さに気付けた気がします。いつも私が見るお米は、農家の人たちがたくさんの手間をかけて作ってくれていました。きっと農家の人たちも、みんなに自分が作ったおいしいお米を食べてもらいたい、という気持ちを込めていると思います。だから、私たちも大事に食べないといけないし、感謝をわすれてはいけないのだと思いました。



二学期をふり返って

ぼくには、二学期に思い出に残ってうれしかったことが二つあります。

平原 涉成

一つ目は、運動会です。今年も去年のようにコロナで短い運動会でしたが、四年生の時とちがい、五年生では学年リレーがありました。ぼくは、三年生

まで一度も学年リレーの選手に選ばれたことがなく、去年はコロナのえいきょうで学年リレーがなくて、とても残念でした。でも、今年は学年リレーがあるので、絶対に出たいと思っていました。だから、選ばれた時は本当にうれしかったです。練習も本番もきんちょうの方が大きかったけれど、ぼくたち白団が一位でゴールでき、回優勝もできたことは、とてもいい思い出になりました。



そしてもう一つは、十二月十五日の青島青少年自然の家での野外活動です。野外活動もコロナのえいきょうで泊まりではなく、日帰りになってしまいました。でも、追せきハイキングとフィールドアスレチックができて、自分で決めた「他の人にめいわくをかけないで、みんな楽しく過ごす」という目標を達成できました。アスレチックでは、一人一人が成功できるように、班のみんなで待ったり、はげまし合ったりしました。みんなのおかげでフィールドアスレチックの課題を達成することができました。

二学期をふり返ると、本当にいろいろなことがあって、ぼくはとても成長できたと思います。そして、五年二組の友達と一緒に取り組み、成長できてとてもよかったです。三学期もクラスのみんなと一緒に成長できる学校生活を送りたいです。

障がいのある人の人権

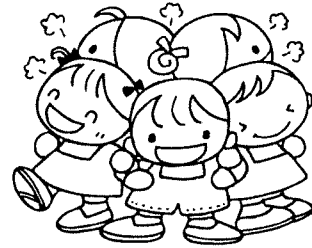
中竹 萌々葉

私は、まだ「人権」という言葉の意味を知りませんでした。でも、最近意味を知りました。「みんなが、みんなちがう。全部が同じ人なんて誰もいない」と。

三年生のころ、学校に、障がいのある人がもつどう犬を連れてきました。その時、私は思いました。「世の中には、もつどう犬を連れて障がいのある人もたくさんいるんだ」と。義足や、車いす、点字ブロック、白杖、また、子どもの

ころから障がいをもっている人は、別の学級や学校で自分に合った勉強をしています。世の中には、いろいろな人が、そして、障がいのある人がいてふつうなんだと思いました。

でも、世の中には、障がいのある人を自分とちがうからと言って、いじめる人も多くいます。自分とちがうからと言って、いじめをすることはなくさないといけません。「自分とはちがうけれど、障がいのある人もがんばっている」。そういう思いもふくめて、やさしい心で、やさしい目で支え合っていきたいと思いました。



高れい者にやさしく

わたしが高れい者について書くと思った理由は、父と母が高れい者と関わる仕事をしているため、ちょっと興味をもっていたからです。

父と母の仕事は、高れい者が住み慣れた家で安全安心にくらせるようにサポートすることです。休みの日の夜おそくや朝早くに、電話がかかってくるのがよくあります。大変だけれど、やさしい声でやさしい言葉で接しています。わたしの母が仕事で大切にしていることは、高れい者の気持ちや思いに寄りそうことだそうです。

わたしの家のとなりに、祖母が住んでいます。祖母は、ひざの手術をして入院していたので、退院して家に帰ってきてからも、立ち上がりや歩くのにつえを使っています。一人でお風呂に入るのも不安があったそうです。わたしは祖母の立場になって考えてみました。手伝ってほしい事がたくさんあるかもしれない



坂元 里帆

いと思ったので、祖母のお手伝いをしようと思いました。例えば、食器あらいです。祖母は長く立っておくことがつらそうなので、夜、祖母の家にとまりに行って、食器あらいを毎日していました。すると、祖母が

「里帆がいると助かる。」

と言ってくれたので、とてもうれしかったです。相手の立場になって行動することが大切だということが分かりました。

高れいになると、体が不自由になりやすいそうです。私は人の役に立つ仕事をすることが夢になりました。だから、夢に一步近づけるように、今から相手の立場になって、人を思いやる心もち、こまっている人がいたらこの二つを心がけて助ける勇氣をもてるように頑張りたいと思いました。

お米を作ってくれる人に感謝

「陽もお米洗い、やってみれば。」

と、母に言われた。ぼくの友達がお米洗いをしていることを母に伝えたからだ。そして、ぼくのお米洗いのお手伝いが始まった。

最初は、洗い方も、どのくらい洗えばいいのかもよく分からなかった。続けていくと慣れてきて、前より早く終われるようになった。けれど、今でもお米が落ちないようにするのが難しい。めんどくさい時もあるけれど、家族みんながおいしく食べられるようにがんばっている。

他にもお手伝いをしている事がある。それは正月のもちつきだ。ぼくたちのもちつきは、祖母の家で親せきといっしょにする。ぼくが手伝っている事は、もちを丸める事だけだ。もちを丸めていると、

「形がきれい。買ってきだみたい。」

と、いつもほめられる。自分で丸めたおちは本当におい



吉田 陽

しい。

この二つのお手伝いで気づいたことがある。それは、食べるのは簡単だけど、作るの難しいということだ。だから、稲を育てている人には感謝している。だが、社会の授業で、稲を育てている人が減少している、と習った。このまま米を育てる人が減ってしまうと、お米の数も減り、お米の値段が高くなる。そうなる、外国のお米を使ったり、パンや麺が主食になったりするかもしれない。ぼくは日本のお米が好きだから、それは悲しい。お米を作る人がもっと増えてほしいと思う。

これから、二つのお手伝いを続けて、ぼくなりに感謝を伝えていきたい。

戦争や平和

私は、昔の戦争と今の平和な暮らしについて考えてみました。

森 結愛

昔は今とちがって、食料が少なかったり、あまりお金がない家があったりと、たくさん苦労をしてきました。しかし、一番大変だったのは戦争だと思っています。たくさんのおぼくさんがたくさんの方の命をなくしました。たくさんの方が悲しんでいるのを思うと、今の自分が楽しくワイワイしている今の差が、とてもいいなっています。

でもなぜ、それでも戦争なんかをするのか不思議です。戦争なんかしないで、今の日本みたいな平和な暮らしをすればよかったのに、私は思います。けれど、戦争をやめるために、原子爆弾が落とされることになりました。そんな大きな爆弾が落とされたら、絶対に人がいなくなります。特に、広島県の人たちは最初に原子爆弾が落とされて、どんなにこわくて悲しい思いをしたか想像するだけで、苦しくなります。

五年生の国語の教科書に「たすねび」という戦争について書かれてあるお話があります。「あや」という登場人物が、あるポスターを見つけて広島島の原爆

ドームに行き、そこで出会ったおばあさんから戦争の話を聞いて、「あや」の気持ちが大きく変わるというお話です。このお話を読んで、私も心を動かされました。

八月六日、私は目を閉じました。原子爆弾を落とされ、それがどんなにおそろしいほどの力だったか。考えただけでもこわいことが分かりました。

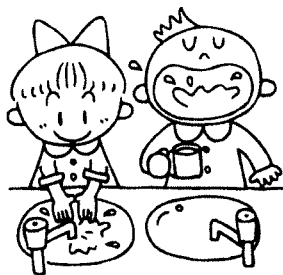
私は戦争というおそろしい経験はしていませんが、今、コロナというおそろしいウイルスが広がっています。マスクをして、いろいろなことが制限されて、がまんをしているときです。コロナが広がる前は、友達と自由に遊ぶことができたけれど、今は外に出ることさえも制限されていて、とても悲しいです。都城市もこの夏、コロナがとても増えました。これからもコロナが広がってがまんをしないといけないと思うと、つらくなってきました。でも、どうにかしてコロナの感せん拡大を止めようとかんがっている人たちもたくさんいます。

私は、少しでも早くコロナがなくなって、また笑顔で幸せで平和な日々がもってきますようにと、ずっと願っています。そして、またもとの明るい世界になって、笑顔いっぱいの中でありたいです。

だから、まず自分がしっかりマスクや小聲、かた手きより、さわらない、そして手洗いうがいもしっかり

して、コロナにかからないように、四つのきまりを守っていきます。きまりを守り続けていけば、いつかはコロナがなくなるはずだから、自分ができている、そして自分にしかできないことを一生けん命していきます。

いつかマスクを取って、また世界のみんながニコニコ笑っているのを見たいです。



五年三組

青少年読書感想文コンクール 地区入選

「いじめ」を読んで

甲斐 音羽

わたしは、「いじめ」という本を読んでみようと思いました。なぜなら「いじめ」という題名を見てとても気になったからです。そして、この本はいじめに関する話が、五十二個入っています。読み終わって、最も印象に残った話は、「つらさがわかるから」という話です。

ある日突然、仲良しだったミズハがいじめをしかけました。本には、それ以来いつもいつもひとり、いつもいつも孤独それは死んでしまいたいほどのつらさだったと書かれていました。

私が、その立場だったら私も同じ気持ちになると思います。でも、その子はいじめにたえませんでした。

ある日突然、今度はミズハへのいじめが始まりました。ミズハは、自分がいじめたその子に「・・・一緒に食べていい？誰も食べる人がいないの。」と言いました。

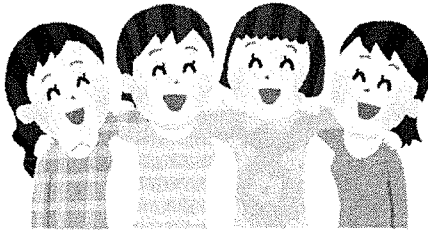
私だったら「無理」と断ったかもしれません。

その子は、そのつらさを知っている、もし今私がつきはなしたら、この人は死んでしまうかも、もしそうになったら私は一生後悔するのかもしれない、そう思って断りませんでした。

最後には、自分のしたことは必ずかえってくるよいことも悪いこともすべてそう信じて今日も一緒にお昼を食べていると書いてありました。

この話を読んでその子は仲良しだった子にいじめられてショックだったし、つらかったと思います。でも、次にその子がいじめられた時に、断らず一緒にお昼を食べていたところが、「すごいなあ」と思いました。

いじめは、人を傷つける事だからやってはいけないことだけど、もしそのような場面に出会ったら「いじめはだめ！」と言えるような強い心をもった人になりたいです。



海そのこの電話局を読んで

平島 快

ぼくは、題名の「海そのこの電話局ってなんだろう?」と思って、この本を手に取りました。そして、表紙の楽しそうな海の生き物の絵にひきこまれました。

この本は、海そのこの魚たちが電話局をやっているお話です。電話局に入ってくる様々な会話に、魚たちがため息をついたり、悲しくなったり、喜んだりします。

たとえば、女の子が父さんと会えなくて悲しんでいるときに、えびたちの歌で元気にさせたり、王様と大統領がけんかをしているときに、ダイオウイカとクラゲの姉妹が「けんか子守歌」でけんかをとめたりします。

ぼくは、特に印象に残ったところが二つあります。

一つ目は、魚たちが国と国の戦争を止めたことです。なぜなら、今も世界の国では戦争が起こっている国があるので、この電話局が現実にもあったらいいなと思ったからです。ぼくは、今は平和な日本に住んでいるのであまりピンときませんが、この前学校でサイレンが鳴って、黙とうをしました。ぼくたちは、戦争があったことを忘れずに、そして二度と戦争をしてはいけなと思います。

二つ目は、魚たちが海底火山の噴火を予知したことです。日本は地震が多い国ですが、熊本県に住んでいるおばあちゃんの家に、大きな地震がきました。道路がぼこぼこになっていたり、電柱が倒れていたりしました。おばあちゃんの家もいろいろなところに、ひびが入っていました。

ぼくのお父さんは、熊本のおばあちゃんの家や病院の人たちに、牛乳や水を届けました。ぼくも、おばあちゃんやおじいちゃんのことを毎日心配でした。

本当にこんな電話局があって、地震の予知ができれば、地震や津波の被害が減るのになと思います。

最後に、ぼくたち自身も日頃から災害への備えをおこたらずにいないといけないなと思います。学校でも避難訓



練がありますが、まじめに真剣に取り組みたいです。

お兄ちゃんありがとう

高田 海紀

夏休みはスケジュールを立て、その中に読書の時間を入れました。その時間に読む本を三股町立図書館に借りに行きました。

わたしが選んだ本は、「お願いフェアリーキセキの運動会」というでんなんことがおきるんだらうとワクワク感をもったからです。

この本の主人公は、水野いるかという勉強も運動も学年一ダメな小学生だけで、フェアリーといういるかにしか見えない小さなようせいにはげまれ日々がんばっている女の子です。

いるかの通っている光陽小学校は四つの組に分かれていて、いるかのクラスは青組でした。

運動会を楽しみにしている人もたくさんいると思いますが、いるかみたいに運動会がいやでしかたがない人もたくさんいると思います。

運動会がきらいな人にはいい方法だと思ったのが、この本に書かれていた「運動会に関係ない自分だけの楽しみを見つけることを考える」と運動会が楽しくなる」のではないかとということです。

いるかが考えた方法は、運動会当日にかた思いのやなぎ田たか男という勉強も運動もできるクールな男の子に

手作りのお守りをわたすことでした。

いるかの家族は大学生になるお兄ちゃんとお母さんと単身ふ任のお父さんの四大家族です。

いるかのお兄ちゃんは大学生になる前、勉強も運動もとても優秀で人望もあって町内では神童あつかいされていました。

地方の大学へ行って一人暮らしをしている間に太ってしまい、自転車で転んで前歯が一本欠けた状態になってしまいました。

お兄ちゃん、いるかの小学校最後の運動会の家族対抗リレーに出るため、お母さんにたのまれて、急に帰ってきました。お兄ちゃんは、昔のおもかげがまったくなくみんなびっくりしていました。



でも、妹思いのところ、わたしは感動しました。いるかのことを人目を気にしないで、一生けん命に応援してくれていました。いるかがわたさうと思つてとうとうわたせなかつたお守りをひろっているかの好きなやなぎ田君にわたしてくれたのもお兄ちゃんでした。

借り物競走でいるかが、「大切な人」をさがしている時、お兄ちゃんを選んでゴールしたことも結局はよかったと思いました。

最後にお兄ちゃんが「この町で神童あつかいされても出るとこ出れば千位にも入らないから」と言った言葉は心に残っています。

お兄ちゃんも、家を出てからの大学生活でつらいことがたくさんあったのだと思います。

わたしは陸上教室に入っていますが、大会に出場した時は、一位になれない時が多いです。世の中には、自分よりも優れている人がたくさんいると思います。いるかのお兄ちゃんも大学に行って、そのことがよく分かる出来事がたくさんあったのではないかと思います。

今までと見た目が大きく変わったお兄ちゃんだけど、妹のいるかのことを大切に思っていることが分かりました。家族っていいなと思いました。

大好きなお米

竹内 俐翔

ぼくは、お米がおいしいのでとても大好きです。

一学期の授業では、田植えの体験がありました。水をはった田んぼに、いねを三本ずつ手でいねいに植えていき、大変手間がかかって、少しやつただけでもつかれる仕事でした。改めて、「お米を作るのは、大変なんだな。」と思いました。

また、ぼくは、父方のおじいちゃんの家のお米を手伝ったこともあります。手伝いで

は、いねかけをしました。せんたく物を干すような感じでした。そのときぼくは、大変さを

知り、ちゃんと「いただきます。」と「ごち

そうさまでした。」と心をこめてお米を食べることに感謝したいと



思いました。

ぼくのご飯と一緒に食べる好きな組み合わせは、母の手作りのなんこつうどん、のり、たまご焼き、ソーセージ、目玉焼き、お茶づけ、たまごかけご飯、なっとう、おみそしる、手作りとなかつ、オクラです。

家庭では、ご飯つぶを残すと、父が注意します。ぼくがご飯つぶを残すと「ちゃんと食べて。」と言います。そういう父をそんけいしています。「お米一つぶ、一つぶには、神様がやどっている。」とよく姉が言います。ぼくも学校の給食で、いっぱいお米を残す人がいるので、「一生けん命育ったお米がもったいないな。かわいそうだな。」と思います。そして、給食センターの人たちがせっかく作ったのにかわいそうだなと思っています。給食センターの人たちがよろこぶようにご飯をたくさん食べています。

これからも、家では母がおいしく作ってくれる料理と大好きなお米を残さずちゃんと食べて、給食もご飯が残らないようにたくさん食べたいです。

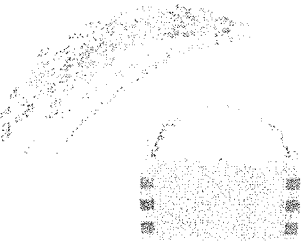
大好きなお米

久保田 晃瑠

ぼくは、お米が大好きです。その理由は、あまくておいしいからです。ご飯をかんんでいるとあまみが出てきます。特に、たきたてのご飯は、つやがあつてほかほかしていて、ぼくの大好きな野菜のためと食べると最高にいいしくて、ご飯を何倍でも食べられます。

ぼくのおじいちゃんは、お米を作っている、ぼくの家族は一年中おいしいお米を食べることができます。おじいちゃんを作っているお米は、とてもきれいなお水で作っているのです、つやとあまみがあつてとてもおいしいです。おじいちゃんのおかげでおいしいお米を食べることができて幸せです。

また、ぼくにはお兄ちゃんがあります。お兄ちゃんはお小麦アレルギー



ギーなので、小麦で作ったパンやケーキを食べることができません。だから、ぼくの家では、小麦の代わりに米粉でパンやケーキをお母さんが作ってくれます。その中でも、一番好きなケーキは、チョコレートケーキです。米粉のチョコレートケーキはともふわふわしていておいしいです。誕生日やクリスマスなどお母さんが作ってくれます。他にも、ピザ、お好み焼き、ドーナツなど米粉でたくさんの料理を作ってくれます。

ぼくの家では、ご飯や米粉をたくさんたべているので、お米はとても大切です。これからも大事に食べていきたいです。

東日本大震災による人権問題

浅岡 結愛

二〇一一年（平成二十三年）三月十一日二時四十分ごろ、東日本大震災がおこりました。私が生まれて約一か月後のことでした。

震源地は、三陸沖でマグニチュード九・〇、最大震度は七でした。日本の地震で過去最大の大きさに立っていることができます、はわないと動くことができないほどの強さだそうです。一九〇〇年以降世界でも、四番目の大きさでした。

地震後の津波は、一番高いところで十四・八メートルに到達したそうです。

死者は一万九千七百四十七名で、現在でも見つからない行方不明者は、二千五百五十六名です。こんなにもまだ見つからない人がいるんだと思いました。

また、他の被害もあります。福島的第一原子力発電所事故です。被災地からの避難者に対するいじめ等の人権問題が発生しています。わたしは、放射線に対する正しい理解が必要だと思っています。そこで、放射線について調べてみました。放射線とは、「いろいろな物を通り抜ける」「いろいろな物の性質や状態を変える」といった特徴をもっていました。そして放射線は、人の目には見えない小さな「つぶ」や「光の仲間」だそうです。人間の体を作っている細胞は放射線をあびると傷ついてしまいます。でも細胞には「自分で傷を治す力」があるので、少しの放射線をあびるくらいなら、元通りになるそうです。そんな人間の細胞もたくさんの放射線をあびると、自分の力

で傷をうまく治せなくなってしまうので、それが原因で「がん」などの病気になることがあります。だから、放射線をあびる量をきっちり管理することが大切です。

東日本大震災では、地震や津波の影響で、機械や建物が壊れ、放射線を出す放射性物質が発電所のまわりに流れてしまいました。福島県の一部では、国が決めた基準を超える放射線が残っているため、立ち入り禁止になっているところもあります。でも、今では放射線が弱くなったり、放射物質を取り除いたりしているのです。立ち入り禁止になっている場所や人が住んではいけない場所の範囲はだんだんと小さくなっています。

また、放射線はもとも宇宙から地球にふってきたり、地球上にある岩などから出ていたり、空気や食べ物にも含まれていたりします。つまり、人間はいつも弱い放射線に囲まれて生きていることになるのです。少しの量の放射線なら、人間の体に問題は起こる心配はないということが分かりました。

わたしが今回学んだことは、東日本大震災の被害と放射線による差別です。特に、放射線による差別は、放射線に対する知識をしっかりともち、正しく恐れる必要があると思います。そうすれば、差別は起こりません。なので、放射線に対する正しい知識を多くの人に知ってもらいたいです。

小学生にタブレットは必要か

山下 亜樹

わたしは、小学生にタブレットは必要であると考えます。

辞書を引く時間がないときや辞書を持ち合わせていないとき、パッと調べられるコンピュータは、大変便利である。間違った情報もあるが、それを見極める力を育てるのも、将来のためになる。なにより、大人になったら、みんながスマートフォンやタブレット、パソコンを持っている世界だ。そんな中で、タイピングができない、コンピュータの機能が使えなくて、仕事が任せてもらえなかったら



大損である。

もちろん、タブレットをやりとすぎると目は悪くなる。これは、教師をしているおばから聞いた話だが、十五分画面を見たら、二十秒から三十秒ほど、最低六メートル先を見ることで、視力の低下は防げるそう。

それに、目が悪くなる一番の原因は、近くのを（三十センチメートル以内）を見続けることであり、それは紙でも画面でも同じことである。普通、手元には目のピントが合いづらいのに、長時間見続けることで、体が合うように目の形を変えてしまう。それを防ぐために、最低六メートル先を見るのだ。つまり、画面を見るから目が悪くなるのではなく、長時間近くを見ていることが原因だったのである。

これらの理由から、小学生にタブレットは必要であると考えます。

小学生にタブレットは必要か

佐々木 太翔

ぼくは、小学生にタブレットは必要ではないと考えます。

もしもタブレットを落として壊してしまったら家族に迷惑がかかるし、変なことを調べる人がどんなクラスにも一人はいる。社会人になるためにタイピング力を上げたり、調べものをするためにタブレットは必要という意見もあるかもしれない。だけど、安全面と便利さを比べると、安全面の方が大切なのではないだろうか。タブレットを壊すかもしれないこと、インターネットには危険がひそんでいるという点から、小学生にはタブレットは必要ではない。

